

# 村野藤吾記念会

Togo Murano Committee

## 第21回村野藤吾賞受賞

設計 北川原温（建築家・東京芸術大学教授）

作品 中村キース・ヘリング美術館

この美術館は、1980年代のニューヨークのアートシーンを席卷したキース・ヘリング作品の美術館である。ヘリングのポップアート的な作品の背後にはシリアスな底なしの闇が潜んでいる。

その闇への扉が開かれるためには、特別な空間と環境が必要であると、この美術館のオーナーと設計者は長く語り合った。その闇を知らなければ光を見ることはできない、と議論を重ね構想を練っていったと設計者は語る。八ヶ岳が裾をひくやや急な斜面地は、厳しい甲斐の駒ヶ岳や北岳と対面し、唐松やコナラが深く覆う斜面地に建てられている。

この静かな森の中にヘリングの作品が散りばめられた光景を思うことから構想が進められた。その結果は、逆に自然の風景と光から隔絶された観念的な濃密な回路として構成されるに至ったと語る。

小淵沢の駅から車で10分、すでに急な八ヶ岳の麓であり、さらにその底を掬いけずられたような窪みには、樹々に包まれた気配が留まっていた。

歩を進めるごとに樹々は透け、建築の彫塑性と絵画性が姿をあらわし、周辺の風景と光を振りはらって形態の語調が浮かび出てくるのである。

入口の扉は、大きく厚く重い。次に広がる世界に入るには大きなエネルギーが求められる。続いて、外光から次第に離れて、闇に近づくかのような誘導スロープを経て、「闇」の展示室、「青い扉のある」展示室、「希望」の展示室へと巡る。

ヘリングと彼が駆け抜けた時代の「光と影」を主題にした空間演出は強く心の残像となり、帰路の経時とともに持続し反芻が止まらなかった。その余韻が長い。

村野藤吾記念会 代表 池原義郎